



## 環境ボランティア育成講座「相模の国から自然塾」

第2回講座 9月7日 参加14人

馬入水辺の楽校の会では、人と川との良い関係を取り戻そうと、「いい川づくり」に取り組んでいます。その一環として、環境ボランティアの育成を目途とした「相模の国から自然塾」を試行的に開始しました。今回は河口域の自然環境の現況を知る旅に出ました。



### ●無くなった干潟

まずは、海岸線の浸食状況を知ろうと河口部を訪れました。ここにはかつて、汐が引くと広さ5haの干潟ができ、県内有数の渡り鳥の渡来地となっていました。周囲には砂丘やクロマツ林、アシ原が広がり、ハマヒルガオやコウボウムギなどの大きな群落がありました。干潟にはヤマトオサガニやゴカイなど、多くの底性動物が棲み、春と秋の渡りの時期にはたくさんのシギやチドリが渡来しました。(写真下)

写真(上)は1970年代後半の探鳥会の風景です。海岸線に沿い、西に伸びた砂丘

の上から、北側の干潟に来る野鳥を観察しています。

干潟は浸食により、2,000年前後にはなくなりました。海岸線が後退し、干潟面積が激減。汐が引いても干潟ができなくなってしまいました。相模川河口の自然を守る会(解散)の会員によれば、波打ち際は100m以上後退したそうです。

原因は海岸線の地形の変化やダム建設により上流から土砂が流れて来ないことによるものです。現在、国土交通省は市民団体や有識者を集め、相模川の海岸線の浸食を止めるため、ダムに堆積した土砂を川に戻す手法を検討しています。川に土砂を積み、台風等の出水で流す試みが試験的に実施され、生態系に悪影響を与えないか等、モニタリングが行われています。かつてのような渡り鳥のいっぱい来る干潟が復活すればいいなと心から望みます。

● 小さな干潟が残っています

河口干潟のことを知った後、競輪場駐車場付近の干潟に向かいました。

小さな干潟ですが、一歩踏み込むと足下から小魚がたくさん飛び出し、みんなドキドキ。水も澄んでおり、テッポウエビの仲間や魚の稚魚、ヒイラギやコトヒキ、クロダイなど、たくさんの生き物が見つかりました。

ここには少ないながらもシギやチドリ、冬にはカモ類も訪れます。新たな生き物観察のフィールドが見つかりました。



●水辺の楽校は生き物のホットスポットだ！



水辺の楽校では、ライフジャケットの使い方や生き物調査、投網の投げ方講習会などが行われました。写真上は柴漬け漁による魚類調査の一コマ。笹を束にして水の中に沈めておくと、カワアナゴ（写真中）やウナギ、エビ類などが棲み



つきます。これまでの調査で、生物のすみかを確保する手法として、極めて有効な手法であることがわかりました。今後、設置数を増やして行く考えです。

当日は投網の投げ方講座会も実施されました。始めは上手く投げられませんでしたでしたが、なんとか形になってきました。やはり練習が重要です。こうした機会が少ないだけに、参加者には大変好評でした。



自然塾は年明けに3回目を開催します。興味のある方はご参加ください。HPで日程等、紹介します。